

総合的な学習「LIFE」デザインの考え方

1 創出の視点

総合的な学習のカリキュラムの骨格を設計するにあたって、留意しなければならない事項は次の通りである。特に実験的なカリキュラムではなく、継続的に安定した状態で運用出来るカリキュラムの開発であること、対象になる生徒が中学校・高等学校であることを十分考慮したものでなければならない。

(1) 現在の教員の構成(人数・教科など)で対応できる内容であること。加えて現在の施設・設備で対応できる内容であること。

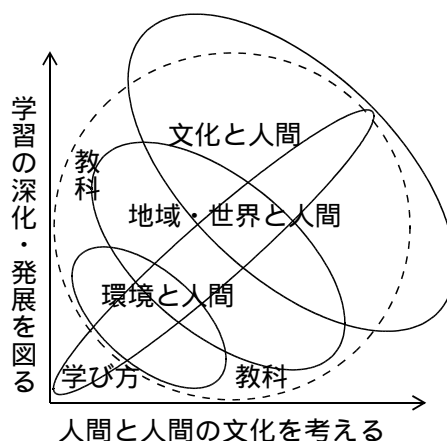
新教育課程の運用は、週休二日制の導入による授業時間数の削減、新しい教科の設置などの、構造的な変化の中で行わねばならない。教科の持ち時間数の増減、「総合的な学習」や「情報」の授業をどの教科の誰が受け持つのか、といったことは学校運営にとって非常に重要なことである。長期的にみて安定した運営ができるようなカリキュラムである必要がある。総合的な学習についての、理想論とのバランスが求められる部分である。現実的な対応が優先することもあり得るし、年度によって教員の構成が変われば、カリキュラムの修正も必要になる。

(2) 「総合的な学習」のカリキュラムの骨格の設計にあたっては、全体を通して流れる理念を明らかにした上で、細目を決めるという手順をとらなければならない。

多くの教科が参加して、新しいカリキュラムを編成する場合、それぞれの教科で何が出来るかを調査し、それをまとめるという手法がとられることがある。この手法は「総合的な学習」のカリキュラム開発においては有効ではない。教科の枠の中で考えられた内容は、教科の学習の発展でしかなく、それらをまとめても全体的に統一のとれた内容にならないからである。

当校の「総合的な学習」においては、学習内容を「人間と人間の文化を考える」という軸と、「学習の深化・発展をはかるための手法」という2つの軸を基盤において、カリキュラムの構築を行っている。

高等学校における「教科」には、背景にこれまで人間がはぐくんできた文化がある。教育の使命の1つは文化の継承である。最近の学校教育の内容や手法を見ると、文化の継承という部分が薄



くなっているように思われる。原因としては、学習内容の多様化や、学校教育を取り巻く学習環境の変化など、複合的なものが考えられる。

「教科」の内容についていえば、それぞれの分野の専門領域があり、それに従って教員の養成も行われ、しっかりしたバックボーンが存在している。しかし「総合的な学習」は内容的にも、教育的な手法においても、そのような基盤をもっていない。「人間と人間の文化を考える」という軸は、中学校・高等学校なりに人間の文化を総合的に捉える所に、基盤を求めようとしているのである。

「総合的な学習」のもう一つの問題は、内容の重複をどのようにして避けるかである。これは、1つの学校の中での問題というより、小学校・中学校・高等学校の校種間での問題の方が大きい。例えばインターネットの利用は、小学校から始まるようになっており、基本的操作は小学校でマスターすることになる。その上で中・高等学校で何をすればよいか、検討せねばならない。「地域学習」についてもしかりである。「学習の深化・発展をはかるための手法」の軸は「教科」の学習の深化をもとに、学習内容の配列を決めるための手がかりになる。

(3) 学習内容の選択制や自主的活動の割合を大きなものにしない。

現在の「学力低下論争」の本質はなにか、議論の分かれるところである。大学サイドから提起されている学力低下の原因のひとつとして、大学入試科目の減少にともなう、高校における履修科目の偏りがあげられている。大学の入試科目だけでなく、選択科目の時間数の増加が、学習内容の偏りに繋がっていることを、見逃すわけにはいかない。加えて「総合的な学習」で取り扱う、環境学習や地域学習などは、答えがでないオープンエンドになるものも少なくない。

生徒の活動的な内容で構成される学習も、全体としての指導が必要であり、そのためには、内容の選択制や自主活動の割合は、大きすぎない方がよいと考えられる。教育課程の編成において、選択制が増加していく流れの中で、「総合的な学習」においては、あえて選択制を避ける手法を提案しているわけである。

(4) 具体的な内容は、「教科」での学習を基盤にして構築する。

全体的な骨格とは違い、具体的な内容や授業方法については、「教科」の学習をベースに編成する。授業を担当する教師の裁量に、大部分まかされるところである。全体の場での議論は必要であるが、担当教員や年度によって変わることも、面白いのではないかと考えられる。

(5) 評価は簡単に

複雑な手続きが必要な評価、授業の流れをさまたげる評価は、日常的に展開していくカリキュラムにおいては適切ではない。学習の節目において、学習意欲の向上に役立ったり、教師の授業方法の改善につながる評価ができるように、カリキュラム編成時に評価の視点などを、組み込んでおく必要がある。複雑なことを避けることが、基本である。

2 校内の組織化と推進体制

校内に作る組織については、カリキュラム開発時の組織と運用時の組織を分けて考えね

ばならない。

(1) カリキュラム開発時の組織

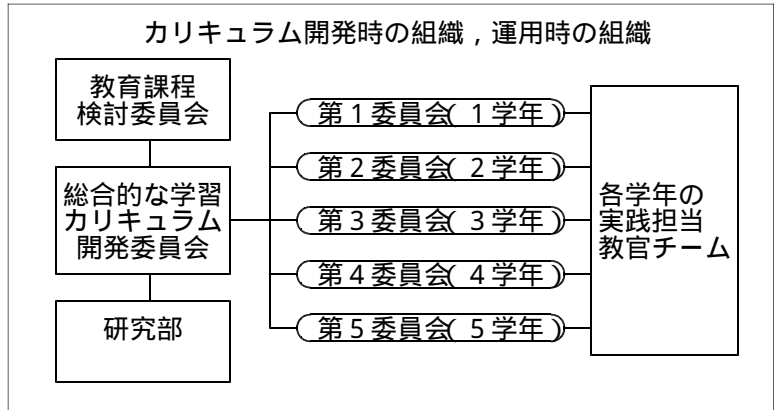
開発時の組織は、開発したいカリキュラムの内容にもよるが、基本的な骨格についての理論構成を中心的に行う少人数のチームを編成し、そこで出来た案について、各教科の代表や学年主任などで構成される教育課程検討委員会などで検討するのが、効果的である。

当校においては、カリキュラム開発委員会が、少人数のチームにあたる。研究部のもとに、カリキュラムの内容にそって委員を任命し、基本的な検討をおこなっている。

カリキュラム開発委員会には、広島大学の先生方を中心とした指導委員会をもうけ、理論的な裏づけや、具体的な指導法についての指導を受けることを可能にしている。「総合的な学習」の内容については、学問的・体系的な裏付けがなく、広い分野にまたがる専門家や研究者の援助は貴重である。当校では、広島大学の全学部にまたがった指導委員会を編成し、大きな成果をあげたということが出来る。

(2) 運用時の組織

「総合的な学習」を実際に担当する教師の配置について、各校で様々な工夫がされているが、当校では担任団や学年団は直接担当しないで、各学年のテーマ・内容に応じて各教科から人材を集めた教官チームを組織している。これによって、



各教師の専門分野を生かした教材の開発や学習展開が構成できる。

「総合的な学習」の時間は、内容が多様であるとともに、活動の場を校外に求めることも多い。またインターネットやパソコンの利用にあたっては、専門的な知識も求められる。授業を担当する教師が、一人で悩んでしまわないような、校内でのサポート体制が必要になる。校内で対応出来ない場合は、校外から指導者に来校していただく体制も、地域の協力を得てつくらなければならない。担当教師が悩んで、疲れてしまうことだけはさけないものである。他校の先生との交流を、計画的に行うことも問題の解決につながる。

(3) 時間割編成の留意点

「総合的な学習」の時間を時間割や年間の運用計画にどのように配置していくのかは、この学習の成否に関わる大きなポイントである。基本的には各学校の実情に応じた工夫をすればよいのであるが、例えば、全校一斉の同時展開では、一斉のまとまったイベントを行うのには効果的であるが、クラスや小グループ単位で個別の課題で取り組む場合には、図書室や特別教室などの活動場所の手配が困難になり、コンピュータ等の機器が十分に使えないといった様々な問題が生じる。当校では、原則として全校一斉展開は行わないでクラス単位または学年単位で教科時間と同じように時間割に配置されている。